様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０４６７

研究課題名（和文）正倉院文書による日本語表記成立過程の解明

研究課題名（英文）Clarification Based on Shosoin Documents of the Process of Establishing a Japanese Orthography

研究代表者
桑原　祐子（kuwabara, yuko）

奈良学園大学・情報学部・准教授

研究者番号：９０４２３２４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：正倉院文書を古代の実用世界の国語資料と位置づけ、外国語の文字である漢字漢文を用いて、如何に日本語を表記したのかということを具体的に解明した。文書作成に携わる下級官人たちは、任務を遂行するために、言葉によって銭や人や物を動かさなければならない。その過程で生まれたのが、和製漢語や漢語に対する新しい意義の付加、日本語特有の助字の語法であった。

研究成果の概要（英文）：Taking the Shosoin documents as Ancient period Japanese language data from the realm of practical usage, analysis of these materials provides detailed clarification of the manner in which the Japanese language was written using the foreign orthography of Chinese characters and sentences. In order to carry out their duties, lower-ranking officials who were engaged in composing documents had to use the written word to mobilize currency, people, and goods. Out of that process were born new words of Japanese construction written in Chinese characters, the addition of new meanings to existing Chinese words, and the uniquely Japanese linguistic convention of supplementary characters to indicate parsing.

研究分野：国語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：国語学　正倉院文書　訓読　言語生活

１．研究開始当初の背景

（１）正倉院文書は、世界でも稀に見る伝世文書であり、その来歴の確かさ・情報量の豊かさは他の文字資料を凌駕する。正倉院文書の研究は歴史学の分野では、明治以来様々に蓄積された。近年は、写真版の刊行・原本調査による情報の提供・索引類の整備が相次いで行われ、正倉院文書研究の研究環境が整い、今や、日本古代史のみならず、国語国文学・仏教史・書道史とその研究領域は広がりを見せつつある。しかしながら、国語学の分野での正倉院文書に対する認識は未だ不十分である。ここ数年は、正倉院文書を資料とした文字の研究や助数詞の研究も散見するが、研究者によって、正倉院文書に対する認識にはかなりの落差がある。正倉院文書の僅か 1～2%の分量しかない戸籍計帳だけが万葉仮名資料として評価されただけである。残り 98%については、十分な検討もなされないまま、国語資料とはならないと断定されているのが現状である。その原因は何か。

第一に、正倉院文書の性格・構造・作成過程等の理解が不十分なこと。

第二に、現状の正倉院文書は、幕末から明治にかけての正倉院文書の整理成巻によって、奈良時代の姿は破棄されている。国語資料として活用するためには、これを奈良時代の姿に復原しなければならないが、その手続きの必要性と手続きの方法の理解が得られていないこと。

第三に、国語学の研究者と日本古代史の研究者との研究交流が希薄なこと。

である。

（２）そのような中で、桑原祐子（研究代表者）は、正倉院文書の特色を生かしながら、国語学的研究を進めてきた。平成 17 年には『正倉院文書の国語学的研究』（思文閣出版）を刊行した。更に、平成 17 年には、桑原祐子の執筆により、『正倉院文書の訓読と注釈　請暇不参解編（1)』（奈良女子大学 21 世紀ＣＯＥプログラム報告集)、引き続き 18 年に『正倉院文書の訓読と注釈　請暇不参解編（２)』（奈良女子大学 21 世紀ＣＯＥプログラム報告集）を刊行した。これは正倉院文書を国語資料として利用するための基礎研究である。平成 19 年度には、3 カ年計画の「正倉院文書読解による古代言語生活の解明」が科学研究費補助金の基盤研究（Ｃ）課題番号（19520396）に採択され、現在「正倉院文書の訓読と注釈」シリーズの継続を進めている。この基礎研究は、「正倉院文書訓読の会」（24 年度から「科研合同研究会」）を母体とする。会のメンバーは国語学の桑原祐子（研究代表者）・日本の古代史の黒田洋子（研究分担者）国文学の中川ゆかり（研究分担者）を中心とし、毎月 1 回のペースで活動を続けている。その成果は、『正倉院文書の訓読と注釈　造石山寺所解移牒符案編（一)』（桑原祐子執筆）『正倉院文書の訓読と注釈　啓・書状編』（黒田洋子執筆）『正倉院文書からたどる言葉の世界（一)』（中川ゆかり執筆）として刊行した。

２．研究の目的

本研究「正倉院文書による日本語表記成立過程の解明」の全体構想は、正倉院文書を古代日本語の、特に実用世界の国語資料と位置づけ、外国語（中国語）の文字である漢字・漢文を用いて、いかに日本語を表記したのか、ということを解明することである。それは日本語表記成立過程の契機を記述することである。つまり、正倉院文書に代表される八世紀の実用の言語生活の中に、後世の日本語表記システムが成立していく契機があることを具体的な事例に基づいて解明することを目的とする。

これまで、国語国文学の分野では殆ど注目されなかった奈良時代の下級官人や在野の技術者・非官人に光を当て、彼らの言語生活を記述し、彼らが具体的な相手と様々なやり取りをする生きた言語生活のなかに、日本語表記成立過程の契機を見出そうとするのが、本研究の特色である。

３．研究の方法

（１）基礎研究として、まず、正倉院文書を一つ一つ読解することから始めた。ここでいう読解とは事柄を読み解くのではなく、どのような言葉で事柄が記録され、理解されたかということ、つまり、言葉を読み解くことである。そのために、個々の文書に関わる帳簿や、時間的に繋がりをもつ文書、応答の文書等を収集し、文書の背景や文書が作成されたときの具体的な状況、文書作成者と受信者の関係などを明確にした。その上で、どのような相手に対して、どのような目的で、何を、どのように表現するのか、また、相手は、それにどのように答えたか、作成者の目的は達成できたのか、達成できないときに、さらにどの様な表現の工夫をしたのか、ということに視点を置いて読解を行った。

（２）第一の視点は、書き手に注目することである。複数の文書を残している人物に注目し、その人物の役所での立場・人間関係・仕事の内容を実証的に解明した上で、特定の人物が作成した文書を収集して、訓読と注釈をおこない、文書ごとに記述を行うこととした記述の観点は以下の通りである。

表現の相手…仕事上の上司か部下か、個人的なつながりのある相手か否か。

表現の場…どのような空間的環境か、どのような時間的背景（時機）か。

表現の目的…実用的な目的か、共感的な目的か、社交的な目的か、鑑賞的な目的か。

表現の内容…仕事上の報告・請求・命令・依頼か、私的な報告・請求・依頼か。

表現手段…解・移・牒・符等の公文形式か、啓・書状の形式か、それ以外の形式か

表現手法…どのような文体を志向したか、漢語を志向したか、敬語表現を志向したか文字

の書き方は丁寧か、崩れているか。どんな紙を使ったか。
表現効果…表現の目的は達成できたのか。
（３）第二の視点は、上代文献・漢籍・木簡との比較検討である。木簡は、正倉院文書と同じ位相の言語資料であるので、正倉院文書の分析によって得られた具体的言語事実の時間的・空間的広がりを確認するには不可欠の素材である。上代文献との比較検討は、分析された言語事実を、日本語表記の世界において相対化するための方法である。漢籍との比較検討は、日本語独自の語法なのかどうか、日本独自の発想に基づく語彙であるかどうかを確定するための重要な手続きである。

４．研究成果
(1) 報告書Ⅰ「正倉院文書の訓読と注釈　造石山寺所解移牒符案（二）」（研究代表者　桑原祐子執筆）を刊行し、研究成果を公表した。
　報告書Ⅰは、注釈篇・論考篇の 2 部構成。注釈篇では、造石山寺所解移牒符案の 20 通の文書の訓読・現代語訳・注釈及び補注による考察を掲載した。注釈では、文書が作成された背景を実証的に明らかにし、書かれた内容（銭・物・人）の動きを追跡した結果を記載した。依頼・請求・命令を内容とする場合、その目的が達成されたのかどうか、達成されない場合は同様な対策を講じたのか、ということを分析し記載した。更に、特筆すべき語彙・語法が、どのように位置づけられるのか（漢語か日本独自の発想に基づく言葉か）ということにも言及した。補注の考察では、解移牒符案の作成者の表記意識・文書の様式・山作所の領の動向・文末の「者」の用法・文末辞「也」の用法について考察を行った。特に、文末の「者」の用法・文末辞「也」については、実務の世界で必要に迫られて生まれた独特の用法である可能性を指摘した。
　論考篇では、本研究課題に関する以下の論考 4 編を掲載した。
①「正倉院文書の『笑』と『筧』」
②「正倉院文書の『堪』と『勘』―古代官人　爪工家麻呂の学習―」
③「正倉院文書の『早速』―和製漢語の生まれる場面―」
④「道豊足の人―あいまいな表現の背景―」
（２）報告書Ⅱでは、「正倉院文書からたどる言葉の世界（二）」（研究分担者　中川ゆかり執筆）を刊行し研究成果を公開した。
　報告書Ⅱは読解篇として 5 通のそれぞれ性格の異なる文書を取りあげた。文書が書かれた背景を明確にした上で、訓読・現代語訳・注釈を施した。その中から、日本語として特徴的な言葉を抽出し、上代文献・漢籍・木簡等での用法を射程に入れて、比較検討しながら考察を行った。5 通の考察項目は以下のとおり。
①逃げてばかりの奴婢は不用。替わりの奴をたてまつれ！
考察１、命令を強調する文末助字「耳」の用法
②大殿門にさしあげるために上等の芹を…
考察１、「大殿門」とは誰か。考察２、「切要」―日本書紀・続日本紀に見えない言葉―
③急いで反古紙をください　―「御所」に申し入れをして―
考察１、反古紙は何に使われるのか。考察２、「御所」とは誰か。考察３、「申給」―官人社会に生きる言葉―
④奈良時代の官人は胡麻油をたいた燈で、仕事をする夜もあった
考察、油の用途
⑤桴工達の訴え　―道主、苦心の文章―
考察１、 雑材を漕んで樽と同じ報酬では…。
考察２、 桴工の言い分
＊実務の世界で、文書を書く官人たちは、自分の書いた文章に相手を動かす力を持たせるために、「耳」など漢文の文末助字の用法を拡大して活用していた。その事実は、漢籍や古事記・日本書紀などでは見出しがたい事実であることを明らかにした。
＊正倉院文書・木簡・唐律の用例を分析し、尊称「殿門」が、宮都が建設され、律令官人制の整備されてゆく中で生まれた官人用語であった可能性を指摘し、さらに、文書や木簡に見える「大」の冠せられた尊称を分析検討した結果、「大殿門」を太師恵美押勝であるとの結論を得た。「御所」については、官選の編纂物である古事記や日本書紀・風土記では神と天皇に限定して使用されるのに対して、正倉院文書ではその用法が拡大されていることを明らかにした。その上で、天皇や聖なる存在への敬意という用語に対する意識は継承されつつ、特別な人物（良弁）を指す語として使用されていることをも明解に論じた。
＊「申給」が両面敬語であることを正倉院文書の分析から明らかにし「マヲシタマフ」は律令官人制の整備によって成立した天皇を頂点とする官人の階層社会の中で生まれた言葉であることを論じた。
　論考篇には、「ミナトと『潮』―河口の景観から―」と「奈良時代、下級官人が文章を書く時―風土記中の引用の「者」と、語順の不要な倒置をめぐって―」の 2 篇を掲載した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）
①<u>渡辺　晃宏</u>、出土文字資料からみた平城京の役所と暮らし、奈良国立文化財研究所『日中韓　古代都城文化の潮流』査読無　2013 年、31～64ｐ
②<u>桑原　祐子</u>　道豊足の人事―あいまいな表現の背景―、『正倉院文書研究』13、査読有、2013 年、104~125p
③<u>中川　ゆかり</u>、奈良時代、下級官人が文章を書くとき（下）―風土記中の引用の「者」と、語順の不必要な倒置をめぐって、美夫君

志 85、査読有、2013 年、1~31p
④黒田　洋子、言葉を綴った人々―丸部足人の場合―、古代学５、査読有、2013 年、13~21p
⑤桑原　祐子、正倉院文書の「早速」―和製漢語のうまれる場面―、叙説 40、査読有、2013 年、33~57p
⑥桑原　祐子、正倉院文書の「堪」と「勘」―古代下級官人 爪工家麻呂の学習―、萬葉語文研究８集、査読有、2012 年、121~147p
⑦中川　ゆかり、奈良時代、下級官人が文章を書くとき―風土記中の引用の「者」と、語順の不必要な倒置をめぐって（上）、美夫君志 84、査読有、2012 年、1~22p
⑧黒田　洋子、官人の思いやり、日本研究 12 輯、査読有、2011 年、32~52p
⑨桑原　祐子、正倉院文書の「笑」と「筧」、日本研究 12 輯、査読有、2011 年、7~31ｐ
⑩中川　ゆかり、ミナトと「潮」―河口の景観から―、風土記研究 34 号、査読有、2010 年　43～72ｐ
⑪桑原　祐子、写経生の書状―正倉院文書にみる古代下級官人の実態―、情報学フォーラム紀要 10 周年記念号、査読無、2010 年 1~8ｐ

〔学会発表〕（計 7 件）
①中川　ゆかり、主張する文体　―漢文助字『耳』の活用―、第 39 回萬葉語学文学研究会、同志社大学、　2013 年 9 月 22 日
②中川　ゆかり、皇后磐之媛の死　―日本書紀の后妃記述の手法―、（古事記学会例会）2013 年 4 月 20 日、学習院女子大学
③招待講演中川　ゆかり、奈良時代、下級官人が文章を書くとき―風土記筆録者の姿を求めて―、美夫君志会全国大会、2011 年 7 月 2 日、中京大学
④桑原　祐子、正倉院文書の「早速」―和製漢語のうまれる場面―、国語語彙史研究会 2012 年 12 月 10 日　大阪大学
⑤黒田　洋子、正倉院文書の可能性、釜山大学日本研究所、2011 年 3 月 28 日、釜山大学
⑥桑原　祐子、古代言語資料としての正倉院文書、釜山大学日本研究所、2011 年 3 月 28 日　釜山大学
⑦桑原　祐子、道豊足の人事　―　正倉院文書の訓読と注釈の作業から　―、正倉院文書研究会　2010 年 10 月 30 日、大阪市立大学

６．研究組織
(1)研究代表者
桑原　祐子（KUWABARA　YUKO）
奈良学園大学・情報学部・准教授
研究者番号：90423243
(2)研究分担者
中川　ゆかり（NAKAGAWA　YUKARI）
羽衣国際大学・人間生活学部・教授
研究者番号：30168877
(3)研究分担者
渡辺　晃宏(WATANABE　AKIHIRO)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・その他の部局・その他
研究者番号：30212319
（４）研究分担者
黒田　洋子(KURODA　YOUKO)
奈良女子大学・学内共同利用施設等・研究員
研究者番号：70566322